

家族の顔が見たかった 編集者の震災手記

■新編集講座 ウェブ版 第92号 2018/1/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神大震災から23年を迎えます。「新編集講座ウェブ版」過去号でお伝えしたように、大阪本社の編集者は、自らも被災者でした＝右欄参照。家族らへの思いと仕事への使命感の中で、心が揺れる体験をしました。今回は、神戸市内の自宅で被災した大阪本社編集制作センターの木田智里部員(OB)の手記をご紹介します＝右欄参照。

■ 恐怖と寒さ、体が震える

激しい揺れと同時にね起きた。妻と息子3人（小3、4歳、2歳）は同じ2階の子供部屋にいる。停電で真っ暗、天地左右も分からない震動の中、手探りで子供部屋に転がり込んだ。妻子にけがはないようだ。本やおモチャが崩れ落ちていたが、本棚は崩れていない。1階に下りると、居間の本や置物が散乱していた。

タンスから着るものを引っ張り出して2階へ。恐怖と寒さで体が震える。パジャマの上にジーパンをはき、子供も着替えさせ1階玄関へ。「すぐ逃げ出せるから」と、玄関に落ち着いた。私が寝ている部屋を改めてのぞくと、スライド書架の1本がはずれ枕の上を直撃していた。子供たちを助けようとして、実は私が「助けられて」いたのだ。

地震後、電話はかけられなかった。午前8時半ごろ、歩いて5分ほどの神戸電鉄鈴蘭台駅近くの公衆電話から会社に電話をかけた。受けた渡会文化デスク(OB)に無事を伝え、スプリンクラーが作動しててんやわんやの社内の状況を知る＝右欄参照。「出て来れるか。足は？」の問いに「何とか」と答えるしかない。

■ 倒壊の街を歩いて会社へ

電気が通じテレビで神戸の惨状を知る。「車では無理か」と長男の自転車で行こうと思ったが、妻に危険とたしなめられた。午前10時ごろ、リュックにカメラや下着を詰め、車で出発。有馬街道を下る。市街地から黒い煙が立ち上る。交通規制と渋滞。倒壊した民家の残骸が続いた。正午のニュースを聞いても神戸を抜けられない。ローソンに人の列。

このままでは会社に着けない。そう思い、芦屋市に入ってからレストランの駐車場に車を置き、徒歩に切り替える。間もなく左手で燃えるマンションを発見しシャッターを切る。ホースは延びているが、水は出ない。遠巻きに近所の人が見るだけだった。

西宮に入っても倒壊家屋が続く。ヒッチハイクで若夫婦の車に「尼崎まで」の約束で乗せてもらったが、夫婦が寄り道すると言うので再び歩く。やや車が流れ出したところでタクシーを拾うが、1キロも進まないうち渋滞。

再び歩き、会社に着いたのは午後6時ごろ。日は暮れていた。

■ 編集者の被災体験を記した号

第20号「ある整理部員の手記」
第68号「被災した編集者の体験」

■ 記憶を語り継ぐための手記

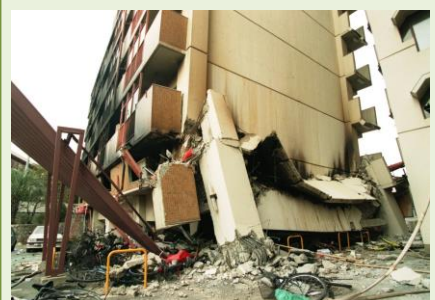
大阪本社編集制作センターは震災の記憶を語り継ぐため、部員や応援者に手記を書いてもらい、1995年6月に冊子「阪神大震災 その時、整理記者は」を制作しました。本稿はこの冊子からの引用です。



住宅地から火が出て、黒煙が空を覆う＝神戸市内で

■ 社内でスプリンクラーが作動

地震の衝撃で、大阪本社編集制作センターでは天井のスプリンクラーが作動。紙面制作に用いる機器が水浸しになり＝写真下、一時は新聞発行が危ぶまれました。



倒壊したマンション＝芦屋市内で

■ オレー人いなくても……

家族を残して職場に向かったが、ラジオで惨状を知るに従って後悔した。余震が来たら家族はどうなる。家が倒れたら……。不吉なことばかり頭に浮かび、今なら戻れる、俺一人いなくても……と、何度思ったことか。

職場に着いた時、すでに最早版（北陸や中四国向け、この日は大幅に繰り上がり、午後8時締め切り）の態勢は固まっていたため、国際面（通常は東京本社制作だが、この日は繰り上げのため大阪本社で制作）、経済面などの制作を手伝い、次の版（近畿地方向け）から学者座談会（見開き、右図）を担当。締め切り時間に滑り込みで「降版」（紙面にOKを出すこと）だった。その間も家族のことが気になる。

最終版（大阪市内と隣接地域向け）終了後も不安は去らない。会社に泊まったが、眠れぬままソファで横になり、余震に身を刻まれる思いだった。翌日の夕刊は1面主任。終了後、渡会デスクに「絶対帰らせてください」とお願いして、自宅をめざすことにした。

■ 14時間かかって帰宅

電車はダメ。国道2号、43号も通行できない。残る方法は車で北回り。午後3時45分ごろタクシーで出発した。だが大阪空港を通過したのが午後7時（注・通常なら本社から車で30分ほど）。

運転手は「こんな時には新聞社の人にお返ししなくちゃ」とやる気を見せていた。しかし車は進まない。陸自川西駐屯地横を通ったのは午前2時。車両課で「鈴蘭台に着くのは朝かも」と言われたのが現実になりそうだった。さすがに運転手も帰りたがる。伊丹に入ってから、当てのないままタクシーに別れを告げ、徒歩に切り換えた。

JR宝塚駅までテクテク横断。暗闇に不安を抱きつつ歩き続け、そこでヒッチハイクし、三田へ着いた。

すでに午前4時。駅前にタクシーが。姫路のタクシーでどうやら道に迷って地図を広げているようだ。寄り道になるが、気のいい運転手さんで、こちらが地図を見ながらナビゲーター役となり、脇道を通りつつ鈴蘭台へ。自宅の前に着いたのは19日午前6時ごろ。地震から丸2日。会社を出て14時間以上が経過していた。

■ 生き方を変えなければ

神戸から立ち上る煙を見ながら考えたのは、震災は人間の人生観を変えるだろうということだ。日ごろ通る阪神高速が崩れ、2日前に家族と買い物をした三宮が壊滅した。安全を疑わなかった電車も高架が倒れた。

危ういものに乗かって生きていた自分。私たちは「知ってしまった」のだ。震災に生き方を「変えられる」のではなく、「変えなければならない」という思いが強い。それは個人的な生き方にとどまらず、都市のあり方を含めて考えるべきで、例えば高架を巡らし、人工島に高層住宅を築くことの是非を問うことも必要だ。復興は「復元」であってはならない。大都市に住むことをやめる、という選択枝も真剣に考えている。



木田部員が制作した学者座談会の見開き紙面＝1995年1月18日朝刊（大阪）



脱線転覆した阪神電車。沿線では火災も＝神戸市内で

2011年3月11日
朝刊「記者の目」
兄も、兄の長男（23）＝仙台市在住＝も安否は不明。炎に我が身をあふれる思いで夜を過ごし、12日早朝、神戸の自宅で気仙沼行きの準備中、兄嫁から中2の次男（14）と2人で逃げて無事という電話が入った。「生きてんだ」「父ちゃんとお母ちゃんの遺影にお祈りしたから守ってくれんだ」。泣き崩れた私の背中を、妻がさすった。



■ 「東日本」で気仙沼の実家が倒壊

木田部員は宮城県気仙沼市出身。2011年3月11日の東日本大震災では、実家が倒壊し、お兄さん一家が一時所在不明になりました（後に全員無事と判明）。

その時の模様は木田部員自身が記事化＝上図。また、「新編集講座ウェブ版」47号「東日本が震えた日」でも取り上げました。